

中東トピック

和平交渉の「進展」報道と 各国の思惑

一九九二年九月一〇日

一国間交渉は、予定されていたローマからワシントンにその場所を戻して、八月二十四日から開催された。ラビン政権の樹立後初めてのこの交渉は、これまでとはその「言葉の調子」も対応の仕方も違うことが強調され、交渉の「進展」とその将来と結果は「楽観的」という表現が連発されている。

ほかでもなく、ブッシュであるとささやかれている。ブッシュにとって中東での成功（イラク南部への飛行禁止区域の設定と和平交渉の進展）は、内政での失敗と、対抗馬のクリントン人気のなかで、「外交のブッシュ」を喧伝し、

挽回をはかるのに最も都合のいい課題だからである。他方、当事者のアラブ諸国にとってもラビンにとっても、クリントンよりもブッシュのほうがいいといわれている。一般的にいえば、冷戦構造の遺物をそのままにした状況の継続よりも、新しい善隣体制をもつてしたほうが、国益にかなうからである。

今号では、こうした各国の思惑を軸にしつつ、この間の流れを追つてみたい。

一 再選にかけるブッシュ政権

ブッシュは、前回の選挙と同様に、ベーカーを確に示された。ブッシュは、ラビンとの共同記

第82号

発行 ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL.(03)3291-5533

編集 J.R.A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費24000円

重要日誌（一九九二年七月一四日～九月一〇日）

日 次 和平交渉の「進展」報道と各国の思惑

- ・和平交渉の「進展」報道と各国の思惑
- ・不屈のガザ回廊の呼びかけ
- ・團結と不屈性の呼びかけ
- ・パレスチナ内におけるPFLP、DFLP共同声明
- ・パレスチナ民族解放運動（ファタハ）臨時指導部の政治声明
- ・PLO、シリア、ヨルダンが信用保証に深い懸念
- ・将来のパレスチナ国家の設計作業
- ・レバノン、イスラエルとの交渉と二〇年ぶりの総選挙について
- ・大脱走

5 1

しく問われるもの。(G) 国連の全面的な参加とECの役割の拡大。以上をイスラエル政府が実践的に示し、交渉の早期の再開のなかでそうした基本が早急に実現されることを期待する。また、「外相会議は、中東を破壊的兵器、核、生物・化学兵器のない地域へと至らしめることを希望」し、それゆえ「イスラエルが核廃絶条約などに加入するよう呼びかける」。最後に、アラブ諸国間の協調と協力関係の再確認。

他方、エジプト、ヨルダンの外相は、この会議に示されたシリアの柔軟性を強調し、「シリアの立場に変化と柔軟性がある。これはわれわれすべてが和平合意について（正面から）話した初めてのこと」といつても過言ではない、イスラエルの変化と柔軟性がある。和平過程の早急な再開の環境が作られている、と言った。

クリントンが大統領になれば、その対中東政策は、親イスラエル、それもイスラエル右派の政策と同様のものになることは明確である。そのためにも、アラブ側は、ラビンの柔軟性に期待すると同時にブッシュ政権の続投に期待を寄せる。それが早急な再開を強調する要因の一つになっている。

それゆえ、ラビンの訪米によってブッシュが一〇〇億ドルの信用保証を約束したことに対し、言葉上では激しい非難を展開したが、交渉の再開を重視した。PLOの要請で急遽開かれた再度のアラブ側の外相会議では、信用保証といふこと自体の「否定的な状況」に加えて、「米国の調停者としての役割からの逸脱」（シャラー

者会見で、「ラビン首相は米国内に多くの友人を持つており、今、その隣に立っているのもその一人である。われわれはこれから両国関係の強化を探している」とラビンをもちあげ、両国間の特別な関係と「二人の関係のよさをダブルさせてみせるとともに、一〇〇億ドルの信用保証の供与を議会に提案することに決定したことを強調した。

議会内からは、米国の財政上、とりわけ納税者への負担の増大の可能性から反対の声が沸き上がった。ただし、この議会からの反対の声は、一〇〇億ドルでは米国内の納税者の負担が多くなるから少なくすべしというもので、ユダヤ・ロビーを意識しつつ、ブッシュに甘い汁を吸われたのではかなわないというものである。アラブ側や欧州などの諸国からは、「米国は政治的な入植と安全上の入植を区別していない。いずれも和平への障害である」（七月二一日、ベーカー）と言つてきたことに反した行為であり、交渉当事者の片方にテコ入れするものであつて、和平の調停者＝共同主催者の立場性として疑問があり、交渉を危うくするという批判であった（資料参照）。

これは当然予測できた。にもかかわらず、ブッシュがあえてそうしたのは、クリントン支持に大きく流れているユダヤ・ロビーを自らの陣営に牽きつけることが最大の狙いだったからである。実際、ペローの不出馬宣言以降、大きく差をつけられていたブッシュは、このあと、かなりの盛り返しを記録している。

中東歴訪のあと、「私が会ったすべての関係者は早急な再開を望んでいる」と、「われわれはそれをすべての熱意をもつて行う」と強調していたベーカーを、ブッシュは選対本部長に据えた。これには、アラブ側から今後の進展への不安が表明された。これに対して、ベーカーの個人的努力ではなく、ブッシュ政権として関係を政策不安定のローマからワシントンへと変更して、早期の開催を行ななどをもつて、アラブ側の不安に対処した。ここでも米国民に対して、やはりワシントン、というよりブッシュ政権が和平の音頭取りであることを示すことが、むしろ中心的な狙いであった。

他方で、イラクのフセイン政権による「同国南部のシーア派への攻撃態勢」を連日のように云々し、英仏ロをも巻き込んで、飛行禁止区域を作りあげた。これには、アラブ内からの反発や批判が出ている。ブッシュはその意図はないとしているが、イラクを三分解しかねないからであり、帝国主義の常套手段である分断・支配の策動とみているからであり、湾岸の産油国にとってはその後のアブ・ムサ島に現実化した「イランの脅威」が、再び迫ることになるからである。ブッシュにとっては、サッダム（フセイン大統領）を悪玉にし、問題なしに、つまり、米軍に損傷もなしに「正義の味方」面ができると読んだ行動であった。とはいっても、それで海湾戦争前のブッシュとサッダム政権との腐れ縁が覆い隠せるわけでは決してないし、湾岸戦

争時の人気を取り戻せるわけでもないが、次から次へと出てくる汚点を少しは隠蔽するところにはつながった。

二 ブッシュに期待するアラブ諸国

アラブ諸国は、七月二十四～五日の両日ダマスカスで関係諸国の外相会議を開き、そこには、各の代表団長も参加した。会議では、イスラエルの新政権とベーカーの歴訪によつてもたらされた情報交流・分析のうえで、早期の交渉の再開とそこで行われる統一した対応の再確認を行つた。

シャラーニ・シリア外相が発表した最終声明の要点は以下である。

「イスラエル政府の言動に変化はあるものの、包括的で恒久的かつ正当な和平の樹立にむけた基本的な原則に立脚することを表明してはいい」。基本原則とは、安保理決議の全面的な遵守であり、被占領下のすべてのアラブ領土の返還であり、当然エルサレムを含み、レバノン南部からの撤退も含むものである。したがつて、帝國主義の常套手段である分断・支配の策動とみているからであり、湾岸の産油国に民の自決権と建国の権利、およびエルサレムと在外パレスチナ人の代表（PLO）の交渉への参加。（C）エルサレムを含む被占領地での入植活動の全面的な停止。（D）解決は包括的であるべきで、個別の解決の拒否。（E）被占領地での非人道的な抑圧、弾圧行為の停止とレバノンへの侵略行動の停止。（F）（イスラエルは自国）の安全保障を強調するが）安全保障は各国に等

外相）を検討した。しかし、この討議は「和平のための協調ある対応のためであつて、戦争のためではない」と前もってエレカット氏が強調したように、「延期や中断ではなにも得るものはない」として、八月二十四日からの「会議への参加を確認」した。シャラーニ外相は、「次回の会議はとても重要である。なぜなら、イスラエルが和平に真剣かどうかなどがはつきりするからである」としたうえで、七月の外相会議で確認したアラブ側の基本的な立場を再強調した。

また、パレスチナ代表団への出国妨害で同交代団の遅れが生じたさいも、アラブ諸国は討議の延期という戦術は取らなかつた。

これらにはつきりと示されるように、アラブ側は、中東和平過程の進展とブッシュ政権の再選とが相関関係にあることを踏まえ、積極的な姿勢をとつた。ラビンの対応に積極的なものが示され、ベーカーの提案に前向きなものがあつたのももちろんあるが、アラブ諸国がブッシュ政権にかけることをより強く表明したと見るべきである。

実際の和平交渉のなかで、「一番の困難さ」が伝えられているのはレバノンである。ベーカーが他のアラブの首都での会談を招請したのに對して、ペレス外相はそれを拒否し、かわってベーカーがベーカーに足を運び、ザハレのハラワイ大統領の自宅での会談へと至つた。これは、内戦の終結と再建を課題としたハラワイ政権にとって、彼自身がその会談のなかで強調した「主権の確立の悲願」を、米国が限定つきであれ承認したことになつた。

その選挙は八月末から九月初の日曜日ごとに三回に分けて行われたのであるが、マロン派の多数派による選挙ボイコットは、ハラワイの娘婿でもある外相のペレスへの嫌がらせと脅しの小さな爆弾攻撃によつてペレス派をも巻き込み、他方でイスラエルの全面的な支援を受ける「南レバノン軍」（SLA）との連携もあつて、「深刻なレバノンの分裂の危機」をつくつた。またそうちした分裂状況は、二国間交渉でのイスラエルの強硬な対応を招くことにもなつた（資料参照）。ハラワイ大統領の息子（現職議員）が落選したり、複数の閣僚が落選したり、新しく政界にうつて出ることを決めたハズバラ系が多くの議席を確保したりといふなか、ボイコット派は勢いづくかに見えた。

だが、ハラワイ政権の、「選挙は合法的」という確固たる対応と国際的な評価（西側外交官の一人は、「キリスト教徒側は、彼ら自身を非難せねばならない。彼らはボールを落とし、ハ

」の恩恵に蒙る外のなまのものでもない。そういう意味でも、パレスチナ人民のアイデントイティを守り、発展させていくことが、今、重要な課題となっている。

七月の前線諸国外相会議では、パレスチナの自決権を含む国連決議の尊重、エルサレムおよび在外のパレスチナ人民の代表を交渉者として認めるなど、軸にパレスチナ人民のアイデンティティを守り、統一を作り出していくことが確認された。また、八月六日にペレスが発表したように、イスラエル政府は八六年の「テロリスト法」の改正を提案するとしており、実際にPLOとの接触を黙認している。これに対して、アラファト議長は、「PLOとの交渉は政治的な必要性であり、和平過程を成功させる要因の一つであり、中東問題の解決のためには必要なことである」と即答した。代表团の出発を妨害されたさいに、アシュラウイ女史は、当局の嫌がらせ行為を非難し、「PLOと交渉すればいい」そうすれば、こんな問題はないし、「より容易になる」と逆手にとっている。

不屈のガザ回廊の呼びかけ

民族統一指導部—P.L.O.、パレスチナ国の呼びかけ 第八四号

る。ジャカルタの非同盟諸国会議でも、和平過程にPLOが参加し、国連が積極的な役割を担うことを呼びかけた。

他方では、アラファート議長は、「インティファーダは継続し、和平過程も継続するであろう。なぜなら、それ（インティファーダ）はパレスチナ人の存在権のもう一つの側面だからである」と語っている。インティファーダの継続、強化、発展とそれへの呼応は、領内―在外のパレスチナ人民のアイデンティティを防衛し、人民の統一をより強固なものとしていく。

インティファーダと交渉を含めたさまざまな闘いと政治展開をもつて、パレスチナ人民のアイデンティティをより強固なものにし、帰還、民族自決権、建国を含めた、国連決議のすべてを実行へと移していくこと、そうした闘いこそが問われている。

機に際し、われらは占領軍と入植ギャングへの抵抗を続いているインティファーダの活動家に、あいさつを送る。英雄的アッラバー村の殉教者を、ナイフと斧の英雄たちを、投石と路上バリケードの英雄たちを、そして不屈の意志をもつてあらゆるファッシュン的弾圧に抗している英雄的獄中者を称えよ。もちろん、諸君が正義の闘いをエスカレートさせるほど、シオニズム占領当局も暴虐を強めてくる。とりわけ、ガザ回廊のわれらが大衆に対しては顯著であり、それは、爆発の臨界点に達してしまっている。これららの暴虐行為は、系統的な回廊封鎖＝餓死攻撃に加え、アラブ人労働者搭乗車輌への攻撃、數十名にのぼる傷害にとどまるものではない。西岸に学ぶわれらが学生たちにも、通学阻止の打撃を与えていた。

われらが人民の士気阻喪を狙い、回廊大衆の困窮をもつて政治的得点をかせぎだそうとする、飢餓と封鎖のイスラエル政策を、民族統一指導部（ＵＮＬ）は非難する。と同時に、国際社会、国際諸団体に対し、このイスラエルの頑迷さに確固たる立場をとり、人質とされてしまったわれらが人民に支援と保護を与えるよう、そして筆舌に尽し難い入党ギヤングのファシスト的畜行を黙過することのないよう、呼びかけるものである。

長期にわたる占領を経て、歴代イスラエル政府やシオニズム諸党派に占領地を一インチたりとも放棄する意図のないこととは証明されてい。ゆえにＵＮＬは、ファシスト・ラビンの政

スバラーニーなどがそれを抬つた」と評した)はボイコット派内に動搖を招いている。その端的な例が、タエフ合意にも反対しつづけてきたアウエンが、九月に入って、入閣してもいいと発言したことである。かつて対レバノン軍団戦争で共闘していたホベイカ無任相らがアウエンを引き込んだとレバノン軍団側は非難した。そうなると、SLA(=イスラエルと組むよりも、アラブの二員という立場を選んできたフアランへ党(カタエブ)内に、やはり閣僚ポストを確保しておくべきという意見が当然のようになってくる。ボイコット派内の分解はもはや火を見るよりも明らかである。

そうした状況を踏まえて、ナビーハ・ベリーラ無任相は、「選挙は合法的であり、不可逆である」、「しかし、今は、国民的な和解が主要な問題としてある。われらがキリスト教徒の兄弟たちを抱擁(=和解)のために戻るべきであり、それをアレンジできるのはアサド大統領だけである」と、シリアに和解の努力を要請したこと

三 パレスチナ人民内の期待と不安、 問われる統一

れわれはレバノンとイスラエルの国境線を承認する」という（対レバノン交渉団長）ハダス発言とも、真っ向うから対立し、その侵略的意図を露呈するものだからである。

さて、以上のことから、エジプトやヨルダンが七月の前線諸国外相会議のあと強調したシリアの柔軟性は、シリアにとって懸案のゴラン問題の解決ということもあるが、むしろレバノン選挙の合法性を米国などに承認させることを意識したものだったとも言えよう。

三 パレスチナ人民内の期待と不安、 問われる統一

ラビンの柔軟姿勢と交渉の「進展」報道は、パレスチナ人民内に期待と不安を大きくしている。期待というのは、自治の確保であり、その後の建国へとつながるであろうことへのそれであり、不安というのは、イスラエルのもとでの限局的な自治、イスラエルの統治の下での「自治」でしかないものに終わるのではないかということを始め、入植問題やエルサレム問題など多々ある。

アシュラウイ女史は、交渉のなかでイスラエル側が提案しているのは、「イスラエルの占領下にわれわれを維持しつづけ、パレスチナ国家への門戸を閉ざしてしまはり方」であって、「合意しがたい」ものであると評しているし、アブデル・シャフィー氏も、ラビンもシャミールとともにシオニズムを基礎にしており、「たんに彼らの対応の仕方が違うだけだ」、「提案内

すでに米国はアラブ側に、「帰還の権利」の放棄と離散のパレスチナ人のアラブ各国での受け入れ、すなわち、難民としてではなく、国民としてのステータス付与で、問題を解決する方向を提示している。また、国連はそれを見越したかのように、UNRWA（パレスチナ難民救援機関）を暫定自治期間の終了をメドに解散する方向で縮小を計っているという。

これはペレスチナ人民のアイデンティティと

われわれはレバノンとイスラエルの国境線を承認する」という（対レバノン交渉団長）ハダス発言とも、真っ向うから対立し、その侵略的意図を露呈するものだからである。

さて、以上のことから、エジプトやヨルダンが七月の前線諸国外相会議のあと強調したシリアの柔軟性は、シリアにとって懸案のゴラン間問題の解決などもあるが、むしろレバノン選挙の合法性を米国などに承認させることを意識したものだったとも言えよう。

容にたいした変化はない」、「一進展」というが、それは「会議を継続する共通の基本点で合意した」だけだ、と発表した。

入植活動を制限したとはい、なくなつたわけではないし、極右入植者グループは夜のうちにプレハブの壁をおし建てて、あたかも工事が一定進行していたかのように見せかけて、軍政当局の目をこまかすなどの手を使つているとおもわれる。また、ラビン政権自身が来年度予算に、被占領地での入植費用を一億ドルも当てよ

が民族性に対するひんぱんな抹消と歪曲の策動に抗するよう、またわれらが大衆に、七月一日の「パレスチナ人の出自の日」を祝うことを呼びかける。

—UNLは、七月二日の回教暦元旦に際し、われらが人民とイスラム民族に祝福を送る。

—UNLは、われらが大衆に、七月八日の偉大な民族指導者ガッサン・カナフアーニ殉難二〇周年を、戦闘的活動をもつて、記念することを呼びかける。

—七月九日は、インティファーダの五六ヵ月目。ゼネストの日である。

—七月一七日は、民族任務遂行中にモサドにより暗殺されたアーテフ・ブセイソ殉教四〇日目であり、戦闘的行動とパレスチナ旗の掲揚などを呼びかける。われらはわれらが殉教者に、われらが民族の正当な権利の達成の日まで闘いを継続することを誓う。

—七月二二日は、われらが不屈の獄中者との連帯、ゼネストの日である。

—七月二九日のパレスチナ女性獄中者との連帯の日に際し、UNLは、二四日から三〇日までの一週間を女性獄中者連帯週間と設定し、大衆デモ、座り込み、関係国際機関への覚え書き発送等を呼びかける。

—七月七日、八日、二一日、二二日は商店の終日営業日である。

* * * われらが勝利は不可避である * *

UNL—パレスチナ国

UNLは、怪しげなグループによるナブルスの活動家アル・アイディイ殺害を深刻に受けとめている。また、この民族運動の殉教者を称える意味でも、殺害犯の発見、処罰に努めることを、首都とした建国の権利の抹消を狙っていること、大義と人民の権利の抹消を狙っていること、なかなか帰還、自決、そしてわれらが人民の唯一正統の代表PLOの旗の下でのエルサレムを知りつくしている。

（われらが人民大衆）

あらゆる可能な手段を用いた偉大なインティファーダの継続とエスカレーションこそ、われらが正当な民族権利回復の唯一の保証である。いかなるイスラエル政府といえども、どのように弾圧を行おうと、われらが人民の正当な権利を無視し続ける限り、イスラエル社会に安全と安定とをもたらすことはできない。

（われらが不屈の人民大衆）

これまでの立場と声明のすべてを通して、UNLは、インティファーダの成果、特にそれが確立したさまざまな概念と倫理のいつさいを維持することの必要を強調してきた。そうした概念や倫理には兄弟愛と連帯、諸党派間の寛容と团结が含まれており、さらには、「狂信」や党派主義、排斥に反対する民主主義的価値観、われらが機関や法に対する尊重、われらが人民の伝統や価値観と相いれず、インティファーダを危機におどしれる脅迫や支配、個人主義に対する闘争といったものを確立しようとしてきた。

1992年10月31日 第82号

月刊 中東レポート

UNLは、怪しげなグループによるナブルスの活動家アル・アイディイ殺害を深刻に受けとめている。また、この民族運動の殉教者を称える意味でも、殺害犯の発見、処罰に努めることを、首都とした建国の権利の抹消を狙っていること、大義と人民の権利の抹消を狙っていること、なかなか帰還、自決、そしてわれらが人民の唯一正統の代表PLOの旗の下でのエルサレムを知りつくしている。

（われらが人民大衆）

あらゆる可能な手段を用いた偉大なインティファーダの継続とエスカレーションこそ、われらが正当な民族権利回復の唯一の保証である。いかなるイスラエル政府といえども、どのように弾圧を行おうと、われらが人民の正当な権利を無視し続ける限り、イスラエル社会に安全と安定とをもたらすことはできない。

（われらが不屈の人民大衆）

これまでの立場と声明のすべてを通して、UNLは、インティファーダの成果、特にそれが確立したさまざまな概念と倫理のいつさいを維持することの必要を強調してきた。そうした概念や倫理には兄弟愛と連帯、諸党派間の寛容と团结が含まれており、さらには、「狂信」や党派主義、排斥に反対する民主主義的価値観、われらが機関や法に対する尊重、われらが人民の伝統や価値観と相いれず、インティファーダを危機におどしれる脅迫や支配、個人主義に対する闘争といったものを確立しようとしてきた。

団結と不屈性の呼びかけ（抄）

民族統一指導部—パレスチナ国の大衆への呼びかけ 第八五号

（われらがパレスチナ人民大衆、栄えあるインティファーダの大衆へ。英雄的叙事詩の創出者たち）

われらが敬けんな殉教者、英雄たちの血で清められ、自由・独立の民族目標達成まで革命を続行するとの固い決意で武装された、インティファーダは新段階に突入せんとしている。

（われらが英雄的人民・大衆）

諸君は今、偉大なインティファーダの初步的目標の達成を目指している。すなわち、「大イスラエル」の唱道者どもの夢、とりわけ占領・支配の恒久化の夢はすでに打ち破られた。ファシスト・シャミールの敗北は、占領を打破し、われらが民族権利を認知せしむる道の第一歩となつた。同様に、インティファーダの継続と拡大は、鉄拳政策の導入者＝ラビンによる言葉のもて遊びを決して許しはしないだろう。われらが人民を甘言でつり、自由と独立の正当な権利獲得の闘争から遠ざかることなどできない。

（われらが戦闘的人民・大衆）

UNLは、七月二二日から二五日、ダマスカスで開かれたアラブ外相会議を歓迎し、とくに、リクード政策の延長でしかないラビンの有害無益な政策に対する統一見解を、高く評価する。

一方、さまざまな民族的グループ、人士の対話を通じてパレスチナの立場を統一し、民族戦略の確立を目的とした、パレスチナ指導部による総括を見直し作業の第一歩は、まずなりよりも栄えるインティファーダの継続、拡大と、それをもつて自由と独立を達成せしむることに基づいていなければならぬと主張する。

UNLは、こうした基本の上に、以下を強調する。

（民族統一指導部（以下、UNL）は、七月二二日から二二日かけてチュニスで行われたパレスチナ指導部会議の結論に鑑み、イスラエル新政府に対し、公正な平和と、本当に真摯たるのか否かを問う。公正な平和とは、エルサレムする。）

UNLは、怪しげなグループによるナブルスの活動家アル・アイディイ殺害を深刻に受けとめている。また、この民族運動の殉教者を称える意味でも、殺害犯の発見、処罰に努めることを、首都とした建国の権利の抹消を狙っていること、大義と人民の権利の抹消を狙っていること、なかなか帰還、自決、そしてわれらが人民の唯一正統の代表PLOの旗の下でのエルサレムを知りつくしている。

（われらが人民大衆）

あらゆる可能な手段を用いた偉大なインティファーダの継続とエスカレーションこそ、われらが正当な民族権利回復の唯一の保証である。いかなるイスラエル政府といえども、どのように弾圧を行おうと、われらが人民の正当な権利を無視し続ける限り、イスラエル社会に安全と安定とをもたらすことはできない。

（われらが不屈の人民大衆）

これまでの立場と声明のすべてを通して、UNLは、インティファーダの成果、特にそれが確立したさまざまな概念と倫理のいつさいを維持することの必要を強調してきた。そうした概念や倫理には兄弟愛と連帯、諸党派間の寛容と团结が含まれており、さらには、「狂信」や党派主義、排斥に反対する民主主義的価値観、われらが機関や法に対する尊重、われらが人民の伝統や価値観と相いれず、インティファーダを危機におどしれる脅迫や支配、個人主義に対する闘争といったものを確立しようとしてきた。

交渉第一週の結果は、イスラエルの意図が、アラブ側代表団の一部を取り込んでアラブ側の団結を崩すことにあることを改めて明らかにし、また、パレスチナ問題においては交渉開始一年を経てなお西岸、ガザ、エルサレムを六七年戦争で占領した土地であるとは認めようとはしないイスラエルの姿勢を浮き彫りにした。パレスチナ側は、なおもイスラエルの要求や

そしてわが人民の声——わが人民の運命をもてあそぶのはやめよ!——という声——を大にして叫ぶことである。

ワシントン交渉の経過とペレスチナ代表団のここ数カ月のありようは、次のことを求めている。まず、米国の選挙戦やイスラエルとの関係に基づくその要求の被害者にならないように全力を現在の政治過程との対決に集中すること、

交渉の直前に、イスラエル政府はいくつかの「便宜的な措置」と制限のいくつかの解除を行つたが、その目的はわが人民の苦悩をなくすためではなく、交渉にむけた懷柔策である。交渉においてはパレスチナ側からの一連の妥協、かけひき、さらには人民の目を、交渉の実質、中心課題からそらせ、自決権を拒み、占領継続の美化を目的としたものである。

民族の権利と民族的な原則の堅持をもつて、同時に、入植の全面的な停止が条件とされないままに信用保証が与えられた場合には交渉のボイコットを強く訴えた七月二二日のパレスチナ

米国の圧力に見合つた「自治」の姿を描こうとしているが、わが大衆がこうした幻影に惑わされるとも、砂漠の流砂のなかへ歩を進めていくこともないだろう。

代表团は、イスラエルがパレスチナ国民一二人の追放を決定したときに、あるいは米国が信託保証を決定したときに、抗議し、交渉への参加を中断すべきであつた。これが、イスラエルの入植地建設強行に対し、取るべき態度であった。彼らは、代表团の一出発拒否に対しても懲戒を示しただけであつた。が、この問題自体が、代表团の参加が不可能になるという本質的な問題へと転化しえたのだ。

ハレスチナ民族解放運動（ファタハ） 臨時指導部の政治声明（抄）

1992年10月31日 篇82号

る。朝型の場合は午後三時まで、午後型の場合には午後一時から八時までとし、営業時間の掲示を。
— U N L は、結婚式での過剰な表現を慎むよう呼びかける。
— U N L は、コーレック（エルサレム市長のこと）の代弁者よろしく、税務署への財産再登録を促す者どもに警告する。
— U N L は、民族產品で代替しうるイスラエル產品のボイコット決定の堅持を再度訴える。
— U N L は、いくつかの血族間対立において實容な態度をとった多くの家族を評価する。退去させられたアル・ファルシハット家の帰還を認めたアル・ハッサン家はその代表例である。公正事務委員会の地位と役割をうち固め、他の係争解決の先例とすることを呼びかける。
— U N L は、イラク人民との連帯を再表明し、対イラク禁輸措置継続を強く非難する。
— U N L は、追放政策の拒否を確認し、国際社

「われらが大衆間、戦闘的な勢力間の正結強化を厳守すること。われらが大衆、戦闘的諸勢力は、この團結に対するいかなる破壊策動にも、あらゆる手段をもって抗すること、そして論争や矛盾を、民主的対話によつて解決すること。」UNLは、一部にみられる長期間の郷土離脱による承認、すなわち敵の原住人口空洞化策動に対する黙認を深く憂慮している。いっそその注意を促し、かかる策動に断固として拒否を。一店舗の開閉時刻、およびゼネストの日を厳守すること。

会に対し、国際意志の履行ならびに安保理決議遵守にむけ、イスラエルへの統制といった責を全うするよう、呼びかける。

— U N L は、東岸から帰郷するわれらが国民に対する占領当局の屈辱的政策を非難し、かかわらず人道的行為の暴露を呼びかける。

— U N L は、ハーゼム・アイードの獄中での暗殺を非難し、国際社会、人道諸団体に対し、こうした犯罪を非難するよう呼びかける。

〈 U N L は、以下の諸活動を呼びかける〉

一八月第一週は、われらが民族的団結を誇示するための祭立つと諸活動の週である。

UNL—パレスチナ国
九二年八月一日

パレスチナ内におけるPFLP、
DFLP共同声明

アル・ハダフ誌、第一一六号

自治にノーを！

わが人民は、独立パレスチナ国家以外のものを受け入れることはない！

「わが人民大衆」、偉大なるインティファーダの人民へ

ラザン政府は、公正な平和とはまったく相反するにもかかわらず、米国政府に支えられて、いわゆる「政治的」入植と「安全保障上の」入植とを区別するといったデタラメな主張をもつて、六七年以降の被占領下のパレスチナを奪いつくす入植を継続している。米政府は一〇〇億ドルの信用保証の供与をもつて、イスラエル政府への連帯と被占領下パレスチナの五一ペーセントにわたっての安全保障上の入植促進への支援とを表明する一方、ジュネーブ条約やパレスチナ人民の正当な諸権利、とりわけ、その自決権に関する国際諸決議の履行に關しては、なんら真剣な措置を講じてはいない。

今、米—イスラエル側の条件下で開かれているワシントンの第六次交渉が、危険な結果と妥協をもたらすことになろうと、われわれは警告する。わが人民はわが土地をイスラエルの占領とその超越下におはたままでの「自治」を認めは

将来のパレスチナ国家の設計作業(抄)

八月一七日付 アル・コツズ紙

パレスチナ現代史において初めて、被占領地の専門家たちがこれまでにない大規模な構想を描きつづける。国民的な必要性の予測と計画の策定、さらには、その実施状況の監督まで行おうとしている。

さまざまな分野の専門家三〇〇名以上が、多くの「作業チーム」に分かれ、暫定自治期間においてパレスチナ当局が稼働しうるよう、各々の専門分野に関する検討を行っている。調整担当のS・スサイバは、「各チームは、パレスチナ社会が二五年間の軍事支配下で達成した以上のものを達成している」と語っている。

これまでのところ、パレスチナ社会自体は、これらのチームの作業についてほとんど報知されてはいない。最近、まもなく発足するであろうパレスチナ警察についての専門家の作業の産物であることをパレスチナ人も理解した。が、詳細については、ほとんど知ってはいない。

スサイバによれば、作業チームは将来にいたる国民的進路を策定しており、これは民族政策と暫定自治の細部を詰めようとしている。パレスチナ代表団への間接的な支援であるという。

「チームは暫定的なものであり、政策策成のためにのみ設置された」「作業を終えて代表団が彼らの支援を必要としなくなれば、作業チームは解散されるだろう」、また、作業チームの構成がや対して、イスラエルが南部に勝手に設定した「安全地帯」の共同統治を提案してきたこと、それはとりも直さず占領の正当化であり、その正当化を交渉の場で扱うことであり、レバノン側は不快と怒りを禁じえない旨伝えた。ジェレジアンはレバノンの立場に理解を示し、イスラエル側との問題を話すと約束したという。

他方、ジェレジアンはレバノン代表団に対し、レバノンの(二〇年ぶりの)総選挙実施情況に対する詳細を質し、米国はその選挙をめぐることを表明した。米国政府は、選出される新しい議会の正当性を承認するかどうかは選挙が終わるまで保留することになろうと伝えた。

や複雑であるとも、彼は述べている。「作業チームは、大きくは経済、下部構造、公共事業、未来の四部門に分かれ、別個に計算処理チームもある」

が、それらはさらに細分されているという。代表団との緊密な関係上、交渉に直接関係する、たゞ

多国間交渉の代表団メンバーが、作業チームのメンバーであつたりもする。警察業務についての委員会は、最近、事例研究のために、ヨルダン警察省に委員を派遣した。

この委員会のメンバーは、八八年にインティファーダ指導部の呼びかけに応じて辞職した元警察官らで、二～三万名からなる地方警察の設立についてヨルダン側当局者と話し合つたと報じられている。が、スサイバらは、この報道を否定した。「現段階での作業のすべては青写真の作成であり、実施にいたるようなものはなにもない」とスサイバは言う。

スサイバは「さまざまなチームのメンバーを研究のために外国に派遣した」が、当面は準備への集中であり、実施時期は政治指導部の決定によるだろう、と語った。

また、作業チームの必要な情報や統計へのアクセスがイスラエル当局によって妨害されており、「代表団を通して当局に人口、天然資源などについての資料を求めているが、いまだに受け取れていない。交渉の成功は信頼を必要とし、信頼とは、重大な情報をなにもイスラエル側は隠していない」とパレスチナ側が感じてこそ、初

イスラエルの対レバノン交渉団員の一人が、二〇年ぶりの総選挙について(抄)

アッサフイール紙 九二年八月三一日

(もし、レバノン政府が平和条約を調印し、かつ国境越えのテロリスト攻撃を叩きつぶすだけの強力な軍を有しているなら、イスラエル軍はレバノンから撤退するであろう)といった。ロ

イターは「まず、レバノン軍に〈安全地帯〉の北側の治安に責任をもたせ、その後に南部(「安全地帯」)について討議できる。彼らは、今、ペイルートの治安さえ保証していかない」と伝えている。イスラエルは、しばしば、「安全地帯」の北にあるシーア派組織やパレスチナ組織の拠点を空爆や砲撃している。

イスラエル側の対レバノン交渉の責任者Y・ハダスは「われわれはレバノンとイスラエルの国境を認めていた」と言う。八月三〇日のCNNのインタビューでも、ハダスは、レバノンは他のアラブ諸国がそうするまで、イスラエルとの和平に調印を拒否している。「彼らはわれわれに対して、〈諸君はまず撤退すべきだ、われわれ(レバノン)は(地域の包括的な和平合意に達するためにも)他(のアラブ諸国)の進展を待つ〉と言つてきた」とレバノン側が交渉しようとしているかのように言つている。

しかし、ハダスは、イスラエルはゴラン高原、西岸、ガザを含むアラブ領土から撤退の意志がある問題ある国家としてのレバノンの将来に大きな疑問を持つていて、それを伝えたという。イスラエル側は欧州側に、最近のレバノンでの問題、とりわけキリスト教徒による反対やボイコットにもかかわらず、二〇年ぶりに議会選挙を行うことは、イスラエル政府にとって、南部からの撤退の可能性を真剣に考へることが不可能になつていてと強調したという(下注)。イスラエル交渉団は、レバノン側が二六日にいわゆる「安全保障地帯」の住民への人道的援助についてのイスラエル側からの共同提案を拒否したことと遺憾の意を表明しており、同筋によれば、イスラエル側は「安保理決議四二五の実施に関し、レバノン側と真剣に討議することにはならないだろう。レバノン問題はすべて安全保障問題のカテゴリーの下に置かれることが多いことである」旨強調したという。「安全保障地帯」とは、北部国境を守るためにいう理由で、八五年にイスラエルが国境ぞいに設定した幅一〇〇一五キロの地帯のことである。七八年

あるのか、という質問への回答をさけた。交渉に参加している別のイスラエル当局者は、ロイターに、「イスラエルはレバノン中央政府に対して問題解決における合意に至らなかつたので、信頼醸成策として、南部(安全地帯)の共同統治を提案した」旨を述べている。

他方、米国務省中東責任者のE・ジェレジアンは、八月二八日、レバノンの交渉団長S・シヤマスを国務省に呼び、米国のレバノンの主権、独立、領土保全を支持する「確固たる政策」を再び強調した。この米国の確認(保証)は、ベーカーがベーカーを訪問した日にタットワイラー女史が行い、さらに、イスラエル代表団がレバノンの将来と独立国としての能力への不信を示唆した後にも、なされたわけである。

情報筋によれば、シヤマスはジェレジアンに対して、イスラエルが南部に勝手に設定した「安全地帯」の共同統治を提案してきたこと、それはとりも直さず占領の正当化であり、その正当化を交渉の場で扱うことであり、レバノン側は不快と怒りを禁じえない旨伝えた。ジェレジアンはレバノンの立場に理解を示し、イスラエル側とその問題を話すと約束したという。

他方、ジェレジアンはレバノン代表団に対し、レバノンの(二〇年ぶりの)総選挙実施情況に対する詳細を質し、米国はその選挙をめぐることを表明した。米国政府は、選出される新しい議会の正当性を承認するかどうかは選挙が終わるまで保留することになろうと伝えた。

のイスラエルの南部への侵略に対する安保理決議(四二五)はイスラエルのレバノンからの即時無条件撤退を求めていた。

交渉団に近いレバノン筋は、「もし欧洲側に語つたことがイスラエルの真意ならば、それはこれに対して、イスラエル政府はレバノンとの交渉が袋小路に陥つていると感じていること、それは主要に「イスラエルは、レバノンが国家として存続しつづけるという確信を持てない」と、長期的な政治的合意を遂行していく独立した主権ある国家としてのレバノンの将来に大きな疑問を持つていて、それを伝えたという。イスラエル側は欧州側に、最近のレバノンでの問題、とりわけキリスト教徒による反対やボイコットにもかかわらず、二〇年ぶりに議会選挙を行うことは、イスラエル政府にとって、南部からの撤退の可能性を真剣に考へることが不可能になつていてと強調したという(下注)。イスラエル交渉団は、レバノン側が二六日にいわゆる「安全保障地帯」の住民への人道的援助についてのイスラエル側からの共同提案を拒否したことと遺憾の意を表明しており、同筋によれば、イスラエル側は「安保理決議四二五の実施に関し、レバノン側と真剣に討議することにはならないだろう。レバノン問題はすべて安全保障問題のカテゴリーの下に置かれることが多いことである」旨強調したという。「安全保障地帯」とは、北部国境を守るためにいう理由で、八五年にイスラエルが国境ぞいに設定した幅一〇〇一五キロの地帯のことである。七八年

- 人がバリケードで対峙。一七日に六人の三年間追放、軍の包囲解除で解決。その間、二〇〇名のハンストやゼネスト、投石などの呼応)。
- 七月一六日
- ・ヨルダン国王、ダマスカス訪問。
- ・レバノン議会、新選挙法を採択(キリスト教、モスレム同数の一・二八議席に)。
- ・南部、レジスタンスの攻撃二つ。
- ・GCとハマス、領内の武闘の強化共同を合意。
- ・南部、レジスタンスの攻撃。
- 七月一九日
- ・ベーカー、中東(イスラエル、ヨルダン、シリヤ、レバノン、エジプト、サウジ)歴訪へ。
- ・南部、レジスタンスの攻撃。
- 七月二一日
- ・PLO拡大指導者会議(二日間)、入植の全面的停止、エルサレム、PLOの交渉への参加、米国はPLOとの討議の再開を。
- ・ラビン、エジプト訪問し、ムバラクと会談。
- ・南部、レジスタンスの攻撃三つ。イスラエル兵一人死亡五人負傷。
- 七月二二日
- ・西岸、ジェニンによる暗殺。
- ・シリアル放送、真の和平には、入植活動の完全凍結、アラブ領土からの撤退が必要。
- ・ピース・ナウ、入植活動の全面停止を、現在二〇〇〇戸の空き家があるなど税金のムダ。
- 七月二三日
- ・エルサレム、オリーブの丘のギリシャ正教の教会を不法建築として破壊。

- ・住宅相&蔵相、入植地の約四割の削減、および道路九本の中止を発表。
- ・南部、イスラエルの空爆。
- 七月二四日
- ・アラブ側外相会議(ダマスカスで)、シャフィーなどの各国団長も参加(本文参照)。他方、ヨルダンのフセイン国王はシリアル訪問。
- ・レバノン、三段階に分けた選挙日を発表。他方、政府軍による公共建設物の民兵組織などによる無断使用からの回復活動進行。
- ・南部、イスラエル機の空爆。
- 七月二六日
- ・エルサレム、インティファーダ開始以来初のアラブ人の(新税反対)公認デモ。
- ・イラク、農業省への立ち入りに合意、他方でクウェートの領有権キヤンペーン。
- 七月二八日
- ・西エルサレム、爆弾攻撃。
- ・レバノン、バールバックの兵舎をハズバラクが政府軍に明け渡し。
- 八月一日
- ・エルサレム、パ人が国境警察を攻撃、ボリーハ人死亡一人負傷、攻撃したパ人は射殺される。
- ・イスラエル誌、ゴラン問題は租借という香港型の解決で。これに対し、アサドは強く非難。
- ・南部、イスラエル機が空爆、九人負傷。
- 八月二日
- ・ガザ、射ち合い、一人死亡、一人負傷。
- ・南部、レジスタンスの攻撃とイスラエル機による空爆、戦艦による砲撃(翌日も空爆)。
- 八月四日

れている南レバノン軍がこの反対派と歩調を合わせ、選挙妨害策動として「安全地帯」から投票に行けないようとした。キリスト教徒の最大勢力であるレバノン軍団、元政府軍司令官のアウン派、それと南レバノン軍(=イスラエル)が共同戦線を作ることになった。そして、南レバノン軍の司令官ラハドは、「レバノンの情勢は最悪へと向っている」と評し、一部の報道機関は、内戦の可能性を秘めた「より深刻なレバノン分裂の危機」とまで表現。さらには、イラクが分割されようとしていることになぞらえて、レバノンも分割されるということまでが言わされた。イスラエル代表団員が欧洲側に言った「国家として存続し得るのかどうかに疑問」というのは、そうしたマロン派多数派の発言などを盾にしていた。だが、そうしたイスラエルの立場は弱いものになつていて、本文でも述べたように、ボイコット派内に分解が起つたからである。)

大脱走 (抄)

九月一一日、アッサフィール紙

ヒヤム収容所から脱走に成功した二人の共産党員が、九月一〇日、ベイルートで記者会見を行つた。「映画〈大脱走〉」の話を同因に話しました。私が話し終えたあと、皆で脱走を具体化していくことになりました」。アッサフ(四年半在監)とファラジ(同、一年七ヶ月)は「安全地帯」から脱出に成功したが、あとの二人はSLAにふたたび捕まつてしまつた。

かれらはシャツをぼぐして、縄をつくり、房の鉄扉の鉄格子をねじ曲げ、そこからぐり抜けた。さらに、かつてのレバノン軍の兵舎であり、イスラエルとSLAが収容所に使つている、その建物の屋上から別の縄で地上へとおりた。かれらは、地上では鉄条網の下をホフクで進んだ。かれらは、いろいろな工夫をこらしながら、そこからの脱出に成功した。

だが、仲間の一人は、地雷に触れてしまい、腕と脚にケガをしてしまつた。彼は、「俺のことは忘れる! 行くんだ!」と言つた。ケガをした彼をかついで逃げることが不可能なことは誰にも分かっていた。彼らは彼をそこに置き去りにせざるをえなかつた。もう一人の仲間は、勧導に支障をおこし、早く走ることができなくなつた。そのため、彼も再び奴らに捕まつてしまつた。

敵が捜索のために用いる照明弾などが、彼ら二人にとっては、山道を、というよりは道なき山を越える援けになつた。セキユリティ筋は、たぶん、ヒヤム収容所から脱走に成功したのは彼らが初めてのケースだろうと言つてゐる。ヒヤム収容所は、八二年のイスラエルの侵略のあと主にパレスチナ人を収用する目的で使用されていたアンサール収容所(が八五年のイスラエルの撤退とともになつて閉鎖になり、そ)の代わりに作られた。

重 要 日 誌
一九九二年七月一四日～九月一〇日

- 七月一四日
- ・アルナジャーハ大学の包囲(構内に約四〇〇〇人)
- 八月一日
- ・アルナジャーハ大学の包囲(構内に約四〇〇〇人)
- 八月二日
- ・ガザ、射ち合い、一人死亡、一人負傷。
- ・南部、レジスタンスの攻撃(翌日も空爆)。
- 八月三日
- ・イスラエルの教育相、エチオピア・ユダヤ人の入学拒否問題で、ユダヤ人の学校がわれらが兄弟を教育から排除するのは国家の恥。
- 八月四日

問セントー」と呼び、「あの獄は暗黒と拷問の場である」と言う。(国際赤十字なども告発しているように)いろいろな拷問が行われ、かつ、囚人は数日に一度、五分間だけ太陽に当たることができるだけだと彼らは言う。拷問については、他の元囚人もイスラエルの将校や兵士によるそれを告発しているが、イスラエル側はそこで起つてることはSLAの責任と責任回避をするばかりである。

ファラジはヒヤム収容所では囚人のほとんどが健康を害していると言う。「病気になつてもまともな治療はなされず、赤十字も訪問しては来ない(イスラエル=SLAは、国際赤十字からの訪問要請などいっさいを拒否しつけている)。われわれは、手紙を受け取ることもなく、外界でなにが起つてあるかを知るのは、新しい囚人からの情報だけだ」。

ヒヤム収容所には約三〇〇人のアラブの囚人がいる。なかには、その劣悪な環境のなかにすでに十年近くも閉じ込められている者もいる。この記者会見に同席した共産党の幹部は、同黨のメンバー約五〇人がそのなかに含まれている、と付け加えた。また、彼らの脱走後、同収容所の警備は格段に強化されたと伝えられている。

・ラビン、来年の四月か五月に自治選挙。疑惑、憎悪、予見を解消し、パレスチナ人との新しい時代を。連邦の可能性、余地はある。

・副戦争相、シリアのスカッドに警告。もしシリアルアがミサイルを発射すれば、全面戦争になる。これには労働党議員からも批判。シリアルアは、根の深い侵略的なあり方と反論。

八月一六日

- ・イスラエル司法相、一二人の追放をキャンセルする方向と発表。

八月一九日

- ・緊急ダマスカス外相会議（二日間）、否定的状況だが、交渉参加を確認（本文参照）。

八月二一日

- ・西岸、アレンビー橋でメンバー五人が年齢制限や代表団名簿にないなどと拒否にあり、代表団は出発見合わせ。アシュラウイ、PLOと交渉すべし。
- ・レバノン、キリスト教徒側、三日間の選挙反対のストに、（以降、三週連続各三日間）。

八月二三日

- ・イスラエル、パロオの釈放や安全対策基準の改訂などを発表。
- ・レバノン、ベカー・& 北部、投票（ペイルート＆中央部は三一日、南部は九月六日）。

八月二十四日

- ・二国間交渉再会（ただし、ペは一日遅れ）。
- ・アラファト、インティファーダは継続し、和平交渉も継続する。インティファーダはペ人の存在権のもう一つの側面である。

・ラビン、来年の四月か五月に自治選挙。疑惑、憎悪、予見を解消し、パレスチナ人との新しい時代を。連邦の可能性、余地はある。

八月二五日

- ・イスラエル側はパに自治について提案。これに対して、後日アシュラウイは、ラビンの心地よい声明を実行へと移すものではなく、内容は実質的な併合である。

八月二六日

- ・イラク、米英などが三二一度以南を飛行禁止区域と設定（二七日から実施）。
- ・アルジェ、エール・フランスのカウンターで爆弾。

八月二九日

- ・南部、レジスタンスの攻撃、（翌日イスラエルの空爆）。

九月一日

- ・アシュラウイ、代表団三名がPLOと相談のためチュニスへ行く（一〇日にアラファトと会談）。わが指導部の承認、PLOが政策を作っていることを強調。

九月二日

- ・カダフイ、九・一記念日むけインタビューで、米英との直接的理解を強調。

九月三日

- ・ペー、一〇項目の自治提案。アブデル・シャフ

九月四日

- ・イスラエル、パロオの釈放や安全対策基準の改訂などを発表。

九月五日

- ・西岸、個人旅行者がイスラエル軍に射殺される。
- ・南部、レジスタンスの攻撃。

九月五日

- ・ペ・ジャーナリスト協会長、ペ・ジャーナリストや新聞への弾圧をやめよとアピール。
- ・イスラエル閣僚（メレツ）、テリトリリーの入植費用一億ドルの予算計上を批判。

九月六日

- ・ペ・ジャーナリスト協会長、ペ・ジャーナリストや新聞への弾圧をやめよとアピール。
- ・南部、レジスタンスの攻撃。

九月七日

- ・ヒヤム収容所から四人が脱獄。イスラエル兵&SLAは大捜索体制（資料参照）。

九月八日

- ・アサド、被占領下ゴランから初来訪の代表団と会談、われわれは眞の平和を望む、ゴランはアラブ・シリアのもの、われわれは必ず再合流する。

九月一〇日

- ・ラビン、部分的撤退するから、シリアは平和条約、外交関係樹立などを、と呼びかけ。これに対して、シャフ

九月一一日

- ・ラビン、外相は、部分解決では安定保証にならず、まったく受け入れがたい。

九月一二日

- ・レバノン政府、ケセルワン地区の選挙を一〇月一一日と発表。

意する、が、その解釈に違いあり。

